

拾遺抄・拾遺集先後問題の再検討

平 田 喜 信

はじめに

第三の勅撰集とされる拾遺和歌集の成立事情については、古来、種々の論議が重ねられてきたが、その結果かなり明らかになったことがらと、今もって判然としないことがある。たとえば、二十巻の拾遺和歌集に対して、組織・内容の上で通う十巻の拾遺抄の存在が、第三の勅撰集成立へと向う和歌史の動きのなかで、どのような存立の意義を有しているのか、両集の撰者は具体的には誰なのかといった問題は、なおも未決の難問に属している。

これに対して、拾遺和歌集（以下「拾遺集」および「集」と略称）と拾遺抄（以下「抄」と略称）の先後関係と、それぞれの成立時期については、堀部正二、三好英二両氏による精密な考証を経て、「抄」の先出、「集」の後出が動かしがたい結論として承認されるに至り、成立の時期もわずか数ヶ月もしくは数年の間に限定されることになった。この問題は現在ではすでに「論証しつくされ」「一応、片づいた観がある」とさえみなされている。

それほかに、この問題についての堀部・三好両氏の論証は精緻をきわめ、説得性に富むものであるが、その立証の方法についてあらためて見返してみると、結論そのものはともかくとして、そこに至る過程や立脚点には多少の問題がないわけではない。本稿では主としてその

ような点に論及し、堀部・三好両氏に代表される拾遺抄および拾遺集の成立論——とくに先後問題——における問題点を整理し、その限界を明らかにしていきたいと思う。

また、「抄」から「集」への筋道を前提として、ほかに「集」の成立の過程に、巻十五までの十五巻の成立と、巻十六以下の五巻の追補という、「集」の編纂時点に時期的なずれを認めようとする成立説——「集」二期編纂説——が存在する。吉川理吉氏によって提唱され、いまなお「生き続けている」^(注4)説であるが、この説を支える論拠は、先の「抄」・「集」の先後を立証する態度や方法と密接にかかわり合っている。併せてこの点にも言及することにした。

1

堀部正二氏は、「拾遺抄及び拾遺集の成立に就いての考察」（国語国文六巻八号、『中古日本文学の研究』所収）と題する論稿において、「抄」・「集」の先後とその成立時期の問題をば「一」（第一章）で論じ、続く「二」（第二章）において撰者の問題、「三」（第三章）において「抄」・「集」の素材となった資料の問題を扱っておられる。

三好英二氏の『校本拾遺抄とその研究』研究篇における第三章「成立考」の課題と方法も、ほぼ堀部氏と同様で、その内部を「拾遺抄及び拾遺集の成立に関する諸説」「拾遺抄成立年次考」「拾遺集成立年次

考」「拾遺抄後出説の検討」「拾遺抄と如意宝集との関係」「拾遺抄・拾遺集の成立流布の年代」と細分して詳述され、堀部氏の「二」「三」にあたるものとしては、別に第四章「撰者考」が立てられている。

いま堀部氏の論稿第一章前半、三好氏の第一節によって、両氏説に至る先行諸説を整理してみると、立場としては相対立する二つ——「抄」抄出説・「抄」先出説——に、研究史的にはおおよそ三段階に区分して理解することが可能であろう。すなわち、平安末以降、袋草紙・古来風体抄・八代集之間事をはじめとして、中・近世の歌人・歌学者たちは例外なく「集」先出・「抄」抄出の側に立った。ただし、ここまでは、公任歌の改作に関する伝説以上の積極的論拠は示されていない。これに対して、方法的に一期を画したのは、堀部氏一による「抄」先出の説である。群書類従所収「拾遺抄」の奥書に見られる彼の説の結論は、

今試以集中所載作者之官位推其時此書之撰即在長徳二年後教経刊修且稍有所増加至長保三年乃改爲拾遺集廿卷也

とあるように、両集所載の作者の官位表記によって両集それぞれの成立年代を推理し、その先後を確定するという、きわめて合理的な方法によって導き出されたものであった。以後、藤岡作太郎・和田信二郎・鴻巣盛広・和田英松など諸氏の所説は主としてこの方法を承けたものであり、次第に精密の度を加えたため成立年代の訂正は試みられたものの、「抄」先出の結論自体は不動のものとして踏襲された。ところが、このような保己一以来の方法に疑問を投げかけ、旧説に立ち帰られたのが、武田祐吉氏の「抄」後出説の立場である。

これに続く堀部・三好両氏による考証は、当然、以上の段階を俯瞰的におさえたものとなっており、また、形の上では第三の武田氏などの批判にも応えたものとなっているため、従来の研究の達成点を示すものとして現在でも重んじられているのである。以後、久曾神昇氏による「抄」成立時期についての補正、島津忠夫・片桐洋一・小町谷照彦・北野克などの諸氏による異本「集」本文の発掘とその位置づ

け、など、「抄」および「集」研究は新生面を開きつつあるが、これらはいずれも、堀部・三好氏説を肯定した上での立論であり、両氏説に対する根本的な疑義は何らさしはさまれることのないのが現状である。

2

堀部氏論稿「一」、三好氏論稿第三章各節において扱われた問題、「抄」・「集」の成立の先後の問題は、上述のように現在では堀部・三好氏説がほぼ定説化しているが、ここで両氏の先後説について、その論証の構造を瞥見しておきたい。両氏説に共通して言えることは、「抄」・「集」それぞれの成立時期を決定するために、官位表記が絶対的な証拠としてとりあげられていることであり、その点では保己一以来の立証構造と全く異なるところがない。「抄」に関しては、

(1) 藤原懷平を「修理大夫」と記していること(抄一〇〇詞書・永観元年十二月・長徳四年十月)

(2) 藤原実資を「中納言」と記していること(抄五四二詞書・貞和本・圖書寮本には「權中納言」とある。長徳元年八月・長保三年八月)

(3) 藤原高遠を「左衛門督」と記していること(抄一一七作者・「左衛門督」の誤写とすれば、長徳二年九月・寛弘元年十二月)

(4) 藤原道綱を「中納言」(抄六七作者「母」・抄五三二作者「母」)および「右大将」(抄二七四作者「母」)と記していること(長徳二年四月)

ハ中納言〱同年十二月ハ中納言〱ハ右大将〱翌三年七月ハ大納言〱(5) 藤原公任を「右衛門督」と記していること(抄一三三作者など、長徳二年九月・長保三年十月)

の五事実が提出されており、堀部氏はこれを結論に結びつけて「而して抄の成立年代は是れら諸人物の在任官位の一致せる期間中に是れを求むべきものであるから、結局道綱が右大将に任じた長徳二年十二月廿九日から、彼が中納言の任を去った翌三年七月五日までの七箇月の間に存する事となるであらう」略抄の撰述を猶かくの如き短日月の

間に明確に規定する事には、今日の所全く反証を見出せぬものの、幾分躊躇せざるを得ない。△略△抄の精撰に当たつての数度の切継・切入の段階が存してゐたらしい事実をも考慮に入れるならば、そこに幾分の余裕をもたせて、抄の成立完成は長徳三・四年、遅くとも長保元年十二月の頃には既に完成して世に流布するに至つてゐたと断ずるが穩当であると思ふ」(傍点添加)と述べられ、三好氏は同じく先の五事実より、「以上の官位書きが合致する年代が即ち抄の成立した年代と見てよいのである。鴻巣氏が、抄の長徳二年十二月より長徳四年までに成るといはれたのは略々正鵠を獲たものといふべく、更に厳密にいへば、抄の成立年代は道綱が右大将に任ぜられた長徳二年十二月二十九日より大納言に転じた翌長徳三年七月五日まで約七箇月の間にあることにならう」(傍点添加)としておられる。(立証の方法と過程が全く同一なのに、両氏の間に推理結果に微妙な揺れが見られることの意義については後に触れる)このように、証拠事実としてあげられたものは、もっぱら官位表記であつて、両氏の基本態度は、引用文中の傍点箇所にもっとも如実に表明されているのである。

一方、「集」の成立時期を示す証拠事実としては、両氏とも次のような事実を列挙されている。

- (1) 卷十六・一〇二二の詞書に「東三条院の御四十九日のうちに……」とあるのは長保四年正月のこと
- (2) 卷十六・一〇六四の歌は寛弘二年四月一日以後の詠
- (3) 卷二十・一三三五の詞書に「成信重家ら出家し侍りける頃左大弁行成がもとに……」とあるのは長保三年二月四日のこと。また行成を「左大弁」とするのは寛弘二年六月以降の筆録であること
- (4) 卷十八・一二〇九の詞書に「成房朝臣法師にならむとて……」とあるのは、長保四年以後のこと
- (5) 卷三・一六九の作者藤原高遠を「大式高遠」と記していること(寛弘元年十二月)

(以上和田信二郎氏指摘)

- (6) 卷三・一五一の詞書に藤原懷平を「左兵衛督」と記していること(長保六年十二月)寛弘六年三月)

(以上鴻巣盛広氏指摘)

- (7) 卷八・三五〇の詞書に「帥伊周筑紫にまかれりけるに……」とあるのは長徳二年四月以後のこと
- (8) 卷十六・一〇六九の詞書に「左大臣のむすめの中宮の料にてうじ侍りける屏風に」とあるのは長保元年十一月一日頃のこと
- (9) 卷十七・一〇九三の詞書に「寂昭がもろこしにまかり渡るとて」とあるのは、長保五年のこと
- (10) 卷十八・一一六五の詞書に「冷泉院五六のみこ……」とあるのは、寛弘元年五月のこと

(以上和田英松氏指摘)

- (11) 卷八・四四九「たきの音は……」は、長保元年九月十二日の詠
- (12) 卷十・五八八の詞書に「左兵衛督高遠賀茂にまうでけるはての夢に……」とあるのは、寛弘元年十二月七日の詠
- (13) 卷十八・一一七四は長保三年十月の詠
- (14) 卷十八・一一七五「水樹多佳趣」の題詠は長保元年五月七日の詠
- (15) 卷十八・一二〇六の詞書に、平惟仲を「中納言」と記していること(長徳四年正月)

- (16) 卷二十・一三三六の詞書に「少納言藤原統理に年頃ちぎること侍りけるを志賀にて出来し侍ると……」とあるのは、長保元年三月二十九日以後のこと

(以上堀部正二氏指摘)

- (17) 卷五・二六九の詞書に藤原実資を「右大将」と記していること。また、卷十八・一一七九の連歌の前句の作者を「右大将実資」と記していること(長保三年八月)
- (18) 卷十六・一〇六五「行きかへる……」の歌は、寛弘二年四月以後の詠
- (19) 卷十八・一二〇二、卷二十・一三三九の作者を「春宮大夫道綱

母」と記していること(長徳三年七月)

(以上三好英二氏指摘)

論中、堀部氏によれば十六、三好氏によれば十九の事実が列挙され、両氏とも「(集成立の)上限は行成が左大弁に任ぜられた寛弘二年六月十九日で、その下限は道綱が春宮大夫より東宮傳に任ぜられ、懐平が道綱の後任として左兵衛督より春宮大夫に任ぜられた寛弘四年一月二十八日である」という結論に到達しておられるが、ただここで、この十六もしくは十九事実の提示のあり方にはいささか問題が残る。これらの事実のすべてがいまの両氏の結論に直結する事実ばかりではないからである。「抄」の五事実とは異り、これらの事実の中には、官位表記に直接関係しない事実(1)(2)(3)(4)(7)(8)(9)(11)(12)(13)(14)(16)(18)が多数含まれている。なぜこのような事実が混在するのか、その因を探ると、これらを列挙したすぐ後で堀部氏が、「結局集の成立は抄の成立よりも後であり、且つ寛弘二年六月を遡り得ない事は、ほぼ断言してよいと思はれる」と述べておられることからもうかがえるように、おそらく推理された「抄」の完成時(長徳三年)以後に製作されたことが確実な歌が拾い出された、その結果なのであろう。であれば、ここにあげられた諸事実は、本来二つの課題にそれぞれ分けて帰属させた方が適切であった筈である。一つは「集」における官位表記の合致時点を探るためのそれであり、もう一つは、「抄」の成立を一応長徳三年とする立場から、「集の中には長徳三年以後の歌が多数含まれている」という別の課題を立証するためのそれであった。この二元的なものが分離されることなく並列され、いずれも「集」の後出を漠然と信ずるための事実として提示されている点が問題である。ちなみに、後者の場合は、官位表記の問題とは無関係に、それだけで「抄」「集」の先後問題に対しての補強的な証拠ともなり得るものである。(もっとも、これらの事実が証拠能力を持つためには、「抄」が長徳三年の成立であること、および十三にものぼるこれらの歌がすべて切継歌でないこと、の二点が予め立証されていなければならないが。)一方、前

者の場合は、その官位表記の信頼度にすべてがかかることになる。このような同次元に立たない事実が混在していることは、堀部・三好両氏の考証の筋道をいたずらに複雑にし曖昧にしていると評すべきであろう。

前掲の諸事実の中でも、例えば(1)(2)(3)の事実は、和田信二郎氏によつてはじめて指摘されたものであるが、和田氏にとってこの三事実は、実質・公任の官位表記のみから「集」の長保三年成立を主張された藤岡作太郎氏の説を批判すべく提示されたものであった。その際和田氏は、「かくの如く矛盾を免かれざる官位をのみ唯一の論拠として、その上に金殿玉楼を建設せんとするは危き業にあらずや。況や他に明確なる証拠として提示せらるべき材料あるに於てをや」(傍点添加)と付け加えられ、官位表記によつて年代の推定し得る事実よりも、詞書その他によつて詠歌時の明らかになる事実の方が、証拠として優越することを明確に説かれたのであった。しかしながら、和田信二郎氏の示されたこのような方法的自覚は、その後わずかに、「抄」後出説——立場としては和田氏とは正反対の武田氏説——に継承されたのみで、全体としてはほとんど顧られることなく過ぎてしまった。

「集」の成立時期を示す証拠事実が、堀部・三好両氏によつて、以上述べたような二種の弁別なく並列されたことは、官位表記の示す事実が、詠歌時の明らかな事実と全く対等に扱われたということであり、和田氏の持たれた危惧は結果として無視されたということである。それだけ、両氏の官位表記に対する信頼は篤かったとも言い得るのである。

3

堀部正二氏は、前に引いたように「(成立年代は)是れら諸人物の在任官位の一致せる期間中に是れを求むべきものであるから……」と言われ、三好英二氏もまた「……以上の官位書きが合致する年代が即ち抄の成立した年代と見てよいのである」と言われる。両氏によれば

作者および詞書中に記載された人物の官位表記の合致する年代はそのまゝ撰集の成立年代なのであって、そこにはいささかの疑いもさしはさまれていないように見える。論理の展開としてはなほだ直截・明快であるが、このような論の運びには、先の和田信二郎氏の所説を引くまでもなく、両氏説に限らず、「官位表記」によって成立年次を推理しようとする諸論の、共通した立証構造上の問題があるように思われる。すなわち、かかる推理の前提には、

A「抄」および「集」の官位表記は、編纂時点におけるものが正確に記載されている

B「抄」・「集」のテキストは、記載時の官位表記をそのままに伝えている

という二点の立証が予め果されていなければならない筈であるが、その点に関する吟味は、堀部・三好氏にも、他の諸氏にも、全く切り捨てられてしまっているのである。この限りでは、堀部己一以後、提示されてきた「官位表記」によって示される証拠事実は、その証拠価値を大幅に減ずる結果となり、吟味の結果如何では、その推理の有効性をも疑われかねないこととなってしまふであらう。

そこで、ここでは一步を進めて、いまのA・Bの二点を立証することが可能なか、言いかえれば、諸論の切り捨てられた点を補うことによって、それらを補強することができるのか、といった点について私なりの見通しを得ておきたいと思う。

官位表記の証拠価値についての漠然とした不安はかなりはやくから提起されており、「抄」先出説をとる和田信二郎氏の立論もその点を考慮したものであったことは前述した通りである。また、「抄」抄出説の武田祐吉氏も、「集」巻二十・一三三五の歌に触れたところで、「かゝる官位書によって説を立つことは危険であつて、この場合現在の拾遺和歌集の原本が寛弘二年以後に於て転写を経たものであらうとは言ひ得るけれども、寛弘二年以後の撰に係るものとは言ふことは出来ぬ」と発言され、官位表記に対する不安を批判の基礎とされたの

であった。堀部・三好氏ともに、かなりのスペースをさいて武田氏説に対する再批判を加えておられるが、武田氏の持たれたこの種の懸念についてはとくに言及されることはなかった。もともと、堀部氏の場合、「抄」の成立時点推理の際に、官位表記による合致点がわずかに七ヶ月であることに幾分の「躊躇」を示されたことからすると、官位表記の証拠価値には多少の危惧の念を抱かっていたのかもしれない。

意識的であると無意識的であるとを問わず、官位表記に対してこのような懸念や不安が存在するということは、「歌集の人物の官位表記は、それほど統一的に、正確に、客観的に記載されるものだろうか」という、先のA・Bの二前提に背反する疑問が常につきまとっているという点でもある。しかも実際に当たってみると、その疑いはかなり現実のものであることが知れるのである。「抄」および「集」の詞書中の人物や作者に施された官位表記に見られる特徴的なことがらをいくつかとり出してみると、まず、両集とも、官位表記の付された事例総数に比して、当代の人物に付され事例、つまり両集の成立時期や先後の問題にかかわる事例はそれほど多くないという事実がある。「抄」の場合で言えば、人物に何らかの官位の付された事例は、延べ百余にもおよぶが、このうち、当代の人物は、藤原道綱・藤原公任・藤原懐平・藤原高遠・藤原実資の、先に「抄」の成立時期推定の証拠としてとりあげられた五人、それにすでに出家している藤原義懐（権中納言）を加え得るにすぎない。「集」では、延べ約百八十事例のうち、これらに加えることのできるものは、藤原伊周・藤原道長・源経房・平惟中・藤原行成などわずかの人物に限られている。これらの人物に付された官位が証拠事実となつて、両集の成立時期がしぼられた筋道はすでに述べた通りであるが、実は、ここに挙げたわずかな当代の人物の表記のされ方にもいくつかの問題が内在しているのである。例えば、「抄」における道綱の官位表記は、「中納言」（夏六七・雑下五三二）、「右大将」（恋上二七四）、「右近大将」（雑下五八八図書寮本による）、の

三様の記載が見られ、ここには集中の同一人物を同一表記で統一しようとした痕跡は認められないのである。三好氏の先の結論は、この「中納言」と「右大将」の重なる期間―七ヶ月―に「抄」の成立時点を見出されたものであるが、後述するようにこれが同一人物の異なる表記である点に問題が残る。「集」の中では、同じく道綱の官位の記載のあり方と、ほかに公任の官位表記が問題である。はじめに道綱の官位表記は、流布本（定家本）によれば「右大将」（夏二〇二・難下五三〇・恋四、九一二）、「春宮大夫」（雑賀一七二・二二〇二・哀傷一三三九）の二様の記載が見られ、彼が右大将に任ぜられたのは長徳二年十二月から長保三年七月までのこと、春宮大夫であったのは長徳三年七月から寛弘四年正月までのことなので、この間から両様の表記の共通時点を探れば、長徳三年七月から長保三年七月までのことということになる。しかし、これも、他の証拠との矛盾をもたらす点から、「右大将」の方の表記は、先にあげた「集」成立の年次を推理するための十六もしくは十九事実の中から除外されており、この点の矛盾が後に触れる「集」二期編纂説を生み出す論拠ともなるのである。次に、公任の官位表記であるが、これは、武田氏説のとりあげられるところでもあり、堀・藤岡説（「集」長保三年成立）の論拠でもあって、やはり大きな問題をはらんでいる。公任の名は、「集」の中では、作者名として十三、詞書中に二あらわれるが、このうち、一〇六五の作者に「公任朝臣」とある例を除いては、すべて「右衛門督」と記されるのである。彼が右衛門督であったのは長保三年十月までで、以後は左衛門督に転じたのであるから、「集」の成立を寛弘の初年とする立場からは明らかに矛盾する。これについて鴻巣盛広氏は、「公任の場合は一の除外例ともいふべく、其かゝる所以については遽に断じがたしと雖、集は抄を基として作りしものなれば、抄に右衛門督とあるよりあやまりて其儘にうつし取りしが偏をなして抄になき歌をも其官名のもとに入れたるにあらじか。更に又想像するに集のなりしは、公任が左衛門督たる間のことなれば、左衛門督とありしを文字相似たるよ

り伝写の際右とあやまりしにはあらざるか」と、その原因を、「抄」表記の影響もしくは「左」↓「右」という誤写という点に求めておられるが、「集」の中に十四例、しかも他の人物の官位にあってはかなり異同の激しい「集」異本の本文にも、一致して「右衛門督」と記されていることからすれば、これを単なる伝写の際の誤りとはみなせない面が存在する。先の道綱の表記とは異なり、ここには何らかの事情――統一をはかる意図――が介在したものと思われる。その事情がどのようなものであったにせよ、「集」における当代の人物十余名、官位表記の延べ事例数十例のうち、十四ヶ所にもわたってこのような矛盾の表記が見られることを過小に評価することはできない。これらの表記の矛盾例は、すべて「抄」・「集」の編纂時に生じたと思われる人物についてのものであった。編纂時の、その人物の呼称をもっともよく反映していると思われる当代の人物の表記においてすら、このような同一人物における不統一、年時的な矛盾の例が見られるのである。

視野をさらに拡大して、両集の編纂時点における過去の人物の表記について見ると、この傾向はいっそう顕著である。たとえば、藤原敦忠に付された官位表記の場合で言えば、「抄」内部にあっては、「集」の内部にあっては、表記の統一は果されていない。「抄」「集」ともに四通りの呼称が試みられているのである。

藤原敦忠の呼称		抄	集
(1) 宰相中将 敦忠朝臣	29詞		
宰相中将敦忠の朝臣の家の屏風にあらたる宿に人きて花みたるかたかけける所に 貫之			宰相中将敦忠朝臣家の屏風に つらゆき
(2) 敦忠朝臣	71詞	抄	集
敦忠朝臣の家の屏風の絵に山里にほととぎすのかたかけける所	107詞		
	敦忠朝臣の家の屏風に つらゆき		

(3) 権中納言 (藤原) 敦忠		(4) 中納言敦忠	
263作	(題ナシ) 権中納言藤原敦忠	399詞	中納言敦忠まかりかくれて後ひえの西坂本の山庄に人／＼まかりて花見侍りける 一条撰政
447作	或人賀し侍けるに 権中納言敦忠	515詞	権中納言敦忠か西坂本の家の滝の巖にかきつけ侍ける 伊勢
460詞	権中納言敦忠か兵衛佐に侍ける時忍ひていひ契りて侍ける事 のよにきこえ侍ければ 左近	445詞	権中納言敦忠か西さかもとの山庄のたきのいはにかきつけ侍ける 伊勢
710作	(題しらす) 権中納言敦忠	1222詞	権中納言敦忠母の賀し侍けるに 源公忠朝臣
1176作	ある人の賀し侍けるに 権中納言敦忠	1288作	朱雀院の御四十九日の法事にかの院の池のおもにきりのたちわたりて侍けるを見て 権中納言敦忠
635作	権中納言敦忠	633作	まさたゝかむすめにいひはしめ侍ける侍従に侍ける時 権中納言敦忠
283詞	権中納言敦忠母の賀し侍けるに 源公忠朝臣	1279詞	中納言敦忠まかりかくれてのちひえのにしさかもとに侍ける山さとに人／＼まかりて花見侍けるに 一条撰政
1222詞	(前掲)		

ここに見られる表記のあり方を、「集」の側からながめるならば、「抄」の表記の直接影響の跡を明瞭にたどることができる。敦忠についてのもっとも標準的な呼称は天慶六年三月、歿時最終の官名を示す、(3)の「権中納言」であろう。それ以外の(1)(2)および(4)は、すべて詞書中に記されたものであり、「集」は「抄」の記述をそのままに承けたものであったことはたしかである。さらに「抄」の側で言えば、このような表記の不統一を生むに至った因に、撰取の際の原資料の記述があったこともまた疑えない。(1)の「宰相中将」なる表記は、敦忠が参議の列に列し、左近衛権中将でもあった天慶二年～天慶五年の間に、年時的には合致する。抄二九すなわち集四八は貫之の詠であるから、用いられた原資料として「貫之集」を想定し、現存本によって見ると、この歌は、「おなじとし(天慶三年)さいさうの中将屏風の哥卅三首」と題されたものの内の一首であったことが知れるのである。従って、「抄」「集」の詞書中に見られる「宰相中将」なる表記は、天慶三年の詠歌時の敦忠の呼称をそのままに反映しているとみなすことができる。また(4)の「中納言」という表記は、厳密に言えば誤記ということになろう。敦忠は歿するまで「権中納言」であり、「中納言」に昇ってははいないからである。「集」各本、「抄」各本とも一致してこの本文を伝えているのが偶然でないならば、これもまた、原資料の記述にまで還元させねばならないかもしれない。

同一人物の官位表記に見られる不統一の例をさらにあげるとすれば、「抄」内部のものとして、藤原朝忠の場合がある。「抄」巻五・一七一の作者には、「中納言藤原朝忠朝臣」とあるのに対し、巻七・二四二の作者には、「右衛門督藤原朝忠」と記されている。朝忠は死の前年病のため、右衛門督・別当を辞しているから、歿時(康保三年)の最終官職は、「中納言」とあるべきところである。一七一の方の詠歌年時は、詞書に、「天曆御時斎宮のくたり侍ける時……」とあるので、天曆の頃とすれば、朝忠の「中納言」とは合致すべくもなく、この記載は、歿時の官職によったものであろう。一方、二四二は、天徳

歌合の詠であり、朝忠は天徳元年にすでに「右衛門督」を兼ねているので、この方は詠歌時点・原資料の何らかの影響が残存したものと見ることもできる。この一首が「集」に採録されたときには、作者記載が「中納言朝忠」と転じていることよりすれば、この記載は、「抄」中の最終官職による統一・整理がやや不徹底であったことを示すのであろう。同様の表記の不統一は、「抄」・「集」に共通する源清隆の記載について、「集」の内部でも言えることである。「集」七二・七四〇の作者として、清隆は「大納言清隆」と記されるのに、「集」一五〇（Ⅱ「抄」九九）の詞書では、「右衛門督源清隆」と「抄」・「集」一致して記されている。この場合も、歿時（天曆四年）の最終官職は「大納言」の方であり、「右衛門督」は承平五年から天慶三年にかけての官職であるにすぎない。この一首も真之の詠であるので、敦忠の例と同様に現存の家集に当たると、「同年（天慶三年）閏七月 右衛門督殿屏風のれう十五首」と題されたものの一首であることがわかり、「右衛門督」は原資料の記載に依ったものであることが知れるのである。

また、藤原国章の場合も、「抄」・「集」の内部に、それぞれ表記の時点の混乱の見出せるものである。「抄」においては、巻九・四〇八の作者には「藏人藤原国章」、巻十・類従本の欠脱部分には、「皇太后宮権大夫国章」と二様の表記がなされている。彼にとって最終の官職は後者であり、前者は「延喜御時ふちつほにて藤の宴せさせたまひけるに殿上のをのこよく哥つかうまつりけるに」という詠歌時点の反映であろう。さらに「集」の中では、国章は「大弐国章」（四九八詞書・一二六七詞書・一二八五作者）、「三位国章」（五五七詞書）「皇太后宮権大夫国章」（五四四作者・一〇六八作者）の三様に示される。彼が太宰大貳をつとめたのは、天元五年までであり、その後歿時（永観三年）までは「從三位・皇后宮権大夫」であったことから、「大弐国章」という呼称は、前任の官職によったものであることがはっきりしている。ただここでは、詠歌時点の記載ということには必ずしも重ならず、たとえば、「二十一代才子伝」の作者見出しにも「前太宰大弐国

章」とあるように、前任の官職の方が通称としてより一般的であったというようなことも想像できる。このほかにも、「集」の中には、藤原恒佐が「右大臣」（巻一・一九詞書、巻十七・一二四九詞書）、「中納言」（巻十・六一八詞書）と、また藤原高遠が「大弐」（巻三・一六九作者）、「左兵衛督」（巻十・五五八詞書）と、それぞれ二様に記載された例などが存在する。

以上、主として両集内で表記が統一されていない例をいくつかとりあげてきたのであるが、これらの例によって見ても、両集の官位表記の記され方は、必ずしも固定化したものでなく、かなり不安定なものであることを知ることはできるのである。一つに原資料の影響が生じた形で残存している場合があり、また一つには「集」にあって「抄」の記述をそのままに承けたところも数多い。場合によっては、ある人物の通常の呼称がその人物の最終官職と一致しないことなどもあって、必ずしも撰集時点における正確な表記、最終官職による表記の統一は十分には果されていないのである。このような、官位表記に対する撰者（もしくは書写者）の態度を考え合わせてみる時、先の「抄」における道綱の表記が、「中納言」とあり「右大将」とあることをもって、「抄」の成立を両表記の合致時点に求めるといふ推理のあり方は、いささか合理的にすぎると言わざるを得ない。その点で久曾神昇氏が「抄」の中の中納言の表記の方を、「抄」の原資料たる如意宝集の表記からの影響として「右大将」という表記と分離して処理されたことは、一つの可能性がさし示されたものと言うことができよう。しかし、それも可能性の一にとどまるのであって、そのような年時の上での矛盾・不統一を生み出す原因には、実は種々多様なものがあつたと想像されるのである。ここまでは、「抄」・「集」を一つの完成体として、そこに見られる矛盾点をのみ指摘してきたのであるが、このほかに、すでに成立した後の「抄」および「集」が、書写を重ねられ、流布していく過程において加えられた表記の改変ということをも考慮に入れておく必要がある。たとえば、近時報告されつつある異本の

「集」の本文を加えて官位表記の内容を検討するならば、ますます複雑な様相を呈してくるのである。いままでは問題にしてきた道綱の場

合について見るなら、

抄番号	抄表記	集番号	巻	具世本	多久本	天理甲本	天理乙本	本北野(克)	本北野(天)	定家本
夏 六七	中納言	夏 一〇二	2	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	右大将
雑下 五三二	中納言	雑下 五三〇	9	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	みちつな	右大将
恋上 二七四	右大将	恋四 九一二	14	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	右大将	右大将
		雑賀 一一七二	18	春宮大夫	大納言	大納言	大納言	大納言	東宮大夫	春宮大夫
		雑賀 一二〇二	18	(倫寧女)	大納言	大納言	大納言	大納言	東宮大夫	春宮大夫
雑下 五八八	右近大将 (圖書寮本)	哀傷 一三三九	20	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	大納言	春宮大夫

のごとくなり、同じ「集」でも定家本に付された表記とはかなり異な

ってくるのである。また、異本の内部においても少なからぬ異同があ

り、「抄」で「中納言」、定家本「集」で「右大将」とある部分が「大

納言」とあったり、「みちつな朝臣」とあったり、また、定家本

「集」・北野天満宮本「集」に「春宮大夫(道綱母)」とあるのが、

「倫寧女」とあったりする例を見ると、かなり恣意的に作者記載が扱

われた痕跡とも考え得るのである。異本「集」の本文の性格はおおよ

そ、「抄」、定家本「集」の中間的なものであり、その成立の過程も、

「抄」↓異本「集」↓定家本「集」という筋道が肯定されているが、

このような、具体的な個々の本文については、必ずしもその位置づけ

は容易でない。ここに見られる、多様な記載のあり方からすると、む

しろ流布の過程における変形ということをも、一つの可能性として考

えておかねばならないだろう。その可能性は同時に、定家本本文につ

いても言い得ることであり、定家以後の改変は少ないにしても、彼以

前の、あるいは彼自身の校訂・整理という過程が皆無であったとは考

えられない。たとえば上記の道綱の表記にしても、二様の表記に整理

されたのは、必ずしも「集」選述の過程におけるものとのみは言い切

れず、可能性の一つとして、定家、あるいはそれ以前の書写・校訂の

過程において、あるべき表記を志向して、不徹底な改変が加えられた

結果とみなすこともできないのではないのである。

このようにとりあげてきた、官位表記の信頼性にかかわる疑問点

を、先に表記を成立時期の推理に用いることの前提として掲げた二条

件A Bに即して言うならば、以上見てきた限りでは、「抄」および

「集」の編纂時に、撰者がその時点における整理と統一を強力に推し

進めたとする積極的根拠は何も見当らない。むしろ、記載の時点の混

乱、表記の不統一などから、撰者の官位表記に対する態度はAを満た

すほど厳密なものでも、完全なものでもなかったことが推測できるの

である。条件Bについては伝本研究がさらに進展しなければ明確にな

らない点が多いが、いま垣間見たように、伝写の過程においても官位

表記がかなり恣意的に動かされたであろうことが、諸本間の異同から

予想できる。言いかえればそれは、その程度にしか書写者の注意が官

位表記に向けられなかったということでもあろう。官位表記自体にこ

のような不安定な要素があるとすれば、成立年時の推理に先立つべき

A B二課題の立証を果すことは、少くとも現在の段階では不可能に近

い。にもかかわらず、官位表記を推理を支える証拠として重視され

る、堀部・三好氏説をはじめとする諸説は、この段階を通り越して合

理的処理へと向われているのである。ここにこれら諸説の共通する問

題点が存し、おのずから推理に当たっての限界が生じていると言わ

であろう。

4

このような官位表記に関する疑問点の指摘は、しかしながら、諸氏が論証の過程で明らかにされた事実、あるいは論拠として用いられた事実の一端を否定し去るということではもとよりない。官位表記のみを証拠に、両集の成立時期をごく短期間にしぼることの適否をここでは論じたのであって、官位表記以外の先後問題にかかわる証拠素材は、いまの段階ではむしろ積極的に取り出される必要があるであろう。官位表記による成立年代推理のほかに、「抄」・「集」の先後を決定する方法は残されていないかと考えるのである。

はじめに、いままで扱ってきた証拠素材のうち、何らかの意味で他の方法にも転用し得る見通しの立つものについて見ておこう。官位表記それ自体は上述のような浮動的な要素を有してはいるが、「抄」・「集」に共通する人物の官位表記を比較するとき、

抄 集(定家本)

藤原懷平	修理大夫	↓左兵衛督
藤原実資	中納言	↓右大将
藤原高遠	左兵衛督	↓大式
藤原道綱	中納言・右大将	↓右大将・春宮大夫

のごとく、「抄」の方には古く、「集」にはより新しい官位表記が付され、その逆が見出し得ないこと、これに「集」の側の矛盾例、藤原公任の「右衛門督」、懷平の「修理大夫」(異本「集」を加えても、先後が逆転しないことなどは、「集」後出の立場に立てば、その蓋然性を主張し得る補強的な証拠事実として生き残り得るものである。

また、先に「集」に関する十六もしくは十九事実が列挙される際に、入り混っていた官位表記に関係しない十三の事実が、「集」の中に長徳三年以後の詠がかなり含まれていることを示し、これも間接的な証拠事実として生き残ることができる。ただし、この前提には、

- (a) 拾遺抄の成立は長徳三年前後である。
- (b) 十三首は、すべて拾遺集完成時に撰入されており、切継歌ではない。

の二課題が立証されていなければなるまい。(b)について見ると、かつて武田氏による「抄」抄出説が出されたときには、この十三事実中わずかに和田信二郎氏の三事実しか対象とならなかった。武田氏は「抄」より後に製作せられたりと称せらるるものは僅にこの三首のみに過ぎず、抄を敷衍して集となしたらん時に於て新採に係ると証明し得らるべきもの、豈た三首のみに止らんや」として、この三首を切継・切入と断ぜられたのであったが、長徳三年以後の詠が三首ではなく、十三首まで取り出されている現在、これらをもすべて切継と認め得るか否かがあらためて問題となる。可能性ということなら、これだけの数の歌がすべて切継歌である可能性は少ない。「抄」が「集」より抄出されてきたと仮定して、切入完了後、つまり完成した「集」からの抄出であったとすれば、その可能性はさらに少ない。切継歌が一首も「抄」にとられなかったことになるからである。これに対して(a)という事実、「抄」の成立を長徳三年に限定することは、上述のように、いささか困難である。このため、十三事実を取り出す際の長徳三年という上限はその意味を失ってしまった。しかしこれも、「抄」完成後の歌の存在を導き出すのが目的なら、「抄」歌のうち製作年代の判明するものも新しい歌、長徳元年の詠を便宜的な上限として、「集」の中からそれ以後の歌を拾えば、先の十三事実とほぼ同じ意義を付与できるであろう。その際もし、「撰集の成立時点は集中の最新の歌の詠歌時点に近接する」という前提が満たされるなら、その近接点は、「抄」長徳元年・「集」寛弘二年であり、成立時期のおおよその見当がつく可能性が生じてくる。

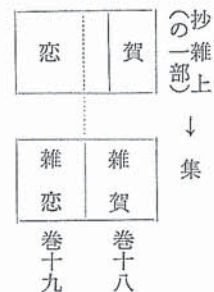
以上の二点は、それ自体では有効な証拠たり得なくても、他の方法で「集」の後出がたしかめられた際には、ともに間接的な証拠事実として証拠能力を持ち得るものである。

そこで、「抄」・「集」の先後ということをはたしめるための官位表記以外の証拠事実が求められるが、かつて鴻巣盛弘氏が「構成上より見て抄が集を原本たりしは争ふべからざる事実なり」と発言されていることに着目したい。残された有効な方法として、両集の構成(部立構成や歌の順序)面から、内部徴証によって両集の先後を決定するという方法があるのではなからうか。この点ではすでに、成立の先後に直接結び付く所論ではないが、堀部正二氏によって、「抄」の雑上・雑下の二巻から、「集」の新設部立が分化・展開して生じた旨の指摘があり、片桐洋一氏によっても、「集」の「抄」からの影響面にわたるさらに詳細な論述がなされている。^(注22)

「抄」・「集」の先後関係はしばらく措くとしても、両集の間に、構成面でも密接な関係のあることは否定できない事実である。①現存本による限り、「抄」歌は一首余さず「集」中にも見出せるものである。②また、「抄」と「集」の部立構成は著るしい類似を示しており、とくに巻一・四に、四季を各々一巻に配し、続いて賀、別とある巻六までの順序は完全に合致している。先行の二勅撰集と比較してみるとこの点での両者の関係の密接さがわからう。③巻五(賀)の内部においては、「集」三十八首、「抄」三十首と歌数に差はあるが、両集の歌順はまったく一致して乱れないこと、④(堀部氏指摘)「抄」の雑上・雑下の内部構成は、「集」の雑春・雑秋・神楽歌・雑賀・雑恋・物名・雑上・雑下・哀傷の諸部立の構成と密接な関係が見られること、などが両集の直接関係を示している。

この関係は当然、「集」↓「抄」、「抄」↓「集」のいずれかでなければならぬが、もし、前者をとるとするならば、次の二点が障害となる。(Ⅰ)「集」↓「抄」では、「集」における恋歌に対する態度が納得できない。(Ⅱ)「集」と「抄」には部分的に歌順の一致する部分があるが、「集」↓「抄」では「集」における歌順の矛盾を説明できないこと。はじめに(Ⅰ)について見ると、「集」巻十八・雑賀の構造が問題である。雑賀の内部は、ほぼ真中に五首からなる連歌が位置しており、その前

半には賀の歌が、後半には恋の歌が配置されている。そうすると「集」の中に恋の歌は、巻十一・十五(恋一・五)、巻十八(雑賀)、巻十九(雑恋)の三ヶ所に散在することになり、部立として不合理を免れない。ここは左図のように、「抄」構造を踏まえての「集」構造と考



えてはじめてよく理解できるところである。恋歌が「純粋な恋歌」と「雑部に所属せしむる恋歌」とに内容から二分されることについては、「抄」「集」の詠歌分類の基本方針に合致するもので問題ないが、「雑部に所属せしむる

恋歌」がさらに二ヶ所に分たれたのは、「雑部に所属せしむる賀歌」が恋歌に比して数量的に少なかったことがその原因であろう。(Ⅱ)についても同様のことが言い得る。ここではその具体例について見ることにしよう。例えば、「集」巻十七・雑秋の一〇九七～一〇〇〇あたりは「女郎花」が中心歌材となっており、このうち、一〇九九だけは、秋の野の花の色々とりすへてわが衣手にうつしてしがないとあって、歌の中に「女郎花」なる語が詠みこまれていない。しかしこの小さな破綻は、一首前の一〇九八がこの一〇九九とともに「抄」雑上にとられた歌(四一九)(四二〇)であることを知って納得できるのである。「抄」にあつては(四一九)Ⅱ一〇九八は「女郎花」を中心歌材とする一首である。(四二〇)Ⅱ一〇九九にはそれと関連した歌材を持つ一首が続く。さらに「抄」ではこのあと、(四二二)(四二二)(四二三)という「紅葉」を歌材とする三首が連なっているが、

このような歌順からなる自然な構造が先にあって、それが集の構造に影響したため、「抄」中の歌順(四一九)(四二〇)がそのまま生かされ、結果として(四二〇)にあたる一〇九九が「集」の構造の中で浮き上がるということになったのであろう。その逆は、「集」における矛盾を消去し、しかも(四一九)(四二〇)の歌順をくずさない「抄」を想定しなければならないので、成り立たない。このような、「抄」

の歌順にあつては矛盾しないものが、「集」構造の中では不自然に浮き上がるという例は、他に「集」巻二十（哀傷）中の二二八九・一二九六などについても指摘でき、こういった「集」における小さな破綻は、結局「抄」構造から「集」構造に移す際の不手際によるものと思われる。

以上で、未だ十分ではなくとも、「集」→「抄」の線が否定できるとすれば、集構成の面から、「抄」・「集」の先後を決定する方法には、かなり明るい見通しが持てそうである。これに先に生き残った補強的な証拠事実をも加えて考えると、「抄」から「集」への過程には、なお明らかにしがたい複雑な事情が横たわっているにしても、二十巻の「集」の構造の方が、十巻の「抄」の構造を承けており、後出であることだけは結論として言えると思う。

5

「抄」構造から「集」構造への展開が、一応容認されるとして、その過程に、「集」の巻十五までの十五巻の編纂された時期と、巻十六以下の五巻が追補された時期との二期を認めようとする成立説——「集」二期編纂説——が存在する。田中新一氏が『平安朝文学史』（昭四〇刊・明治書院）の「拾遺集」の項で、「八略」又成立についても二期にわたって編纂されたとする説も吉川理吉氏以降生き続いて『拾遺集』成立論の今後に残された問題は少なしとしない。」と展望されたように、この説は現在でもなお有力である。

はじめに、もっとも早くこの立場に立たれた吉川理吉氏の説かれるところを見ると、その論拠は次のようなものである。

(i) 道綱（道綱母）の称呼が、巻十五以前では右大將道綱母とあり、巻十六以後では春宮大夫道綱（母）とあること

(ii) 拾遺集二十巻の部立が巻十六以降、雑春、雑秋、雑賀、雑恋、哀傷と続き、この体裁自体が後より追加の貌ではないかと考えられること

この二点から、吉川氏は、「拾遺集廿巻は一時の撰集で無く、初め十五巻と後の五巻と、本集と補遺と合編の姿のもので、前者は長徳二年乃至長保三年に、後者はそのうち寛弘四年までに夫々成ったものとそれだけは断定せられる」と結論された^(註25)。

ところが、実際には、そのように明快には割り切れないものがあり、巻十五以前にも、長徳二年乃至長保三年以後の詠作と思われる歌が含まれている。その点を最初にとりあげて吉川氏説に批判を加えられたのは三好英二氏であったが、近時、久曾神昇氏は、吉川氏説を踏まえた上で、「……従って拾遺集の完成した頃は、道綱は既に右大將ではなかった筈である。かくて前の十五巻が編輯せられる頃は右大將であつたであらうが、後の五巻の成る頃には既に右大將を辞してゐたであらう。その際の十五巻にも加筆せられ、左兵衛督藤原懷平（巻三）、大式高遠（巻三）の如く、官職名の訂正せられたものもあり、高遠の歌「木綿だすき」（巻十）の如く増補せられたものも存するのではあるまいか。かく考へれば確然と二期に区分して見ることは許されないが、編纂動機よりすれば、二期に区分し得ると思ふ。」と述べられ、修正を加えた上で、なお二期にわたって編纂が行なわれたことを肯定しておられる^(註27)。

村瀬敏夫氏は、吉川・久曾神氏説の結果をもって、「しかしそれに従うなら、集の編纂は相当長期間にわたってなされたと言うべく、院の熱心のほども知られよう。」と、花山院ご自身による編纂の事情にまで論を進めておられる。また、島津忠夫氏も、「おそらく花山院が十巻の拾遺抄にあきたりなくて、二十巻の集を求められたところが、すでに拾遺抄として非常に整った撰集を示した公任が固辞したところから、花山院が、周辺の人々とともに二十巻の拾遺集を計画せられたのではなからうか。さうして、かなりの短期間に、十巻を二十巻に増補することに無理があつたのではないかと思はれるのである。その際とりあへず十巻を十五巻に、更に二十巻にといった増補の過程を辿ったことも考へられよう。」とされ、十巻から二十巻に増補する途

次に、十五卷の「集」があったことを想像されている。

このように、「集」の編纂を二期に分ける考え方は、現在かなり一般に行なわれているが、その主要な論拠となっている点は、先にあげた吉川氏の(イ)(ロ)の二点、——とくに(イ)——であろうと思われる。(イ)では、ここまでに何度か組上にのせた、「集」(定家本)における道綱(母)の表記が問題にされている。卷十五以前には「右大将」とあって、彼は長保三年までしかこの地位にとどまらなかったため、「集」の成立を寛弘の初めとすると明らかに矛盾が生ずるのである。その矛盾を解消すべく、二期の編纂が考え出されたわけであるが、この立論のあり方は、先の「抄」・「集」の先後に関する諸説と全く軌を一にしている。ここに見られる官位表記重視の姿勢は、堀保己一以来のこの面での合理性が、さらに極端なまでに追求された、その結果であると言えよう。しかしながら、すでに述べてきたように、この道綱に関する二様の表記は、必ずしもそれぞれの撰取時点を表わすほどに厳密な記され方をしているとはかぎらない。また、どこまでこれを原初的なものと認め得るかどうかも疑問である。吉川氏は流布本(定家本)の「集」によって立論されたのであったが、先に見たように、異本の「集」による限り、卷十五以前、卷十六以降で官位に年代的なずれはなくなってしまうのである。ほかに同様の徴証が「集」の中に多数見出し得るのであればともかく、一人物の二様の表記のみで、「集」の編纂年代を推理することは、3でも述べたように、避けるべきではないかと思われる。

(ロ)は、「集」の部立が卷十六以下「雑春」「雑秋」「雑賀」「雑恋」などであって、いかにも追加して増補されたかのような形をしている点であるが、この点については、堀部氏、片桐氏の前掲論中にすでに明らかにしている。「雑春」以下の諸巻は、「抄」雑部からの影響であることが歴然としている。小町谷照彦氏が、「(増補を想定する説は)拾遺抄との関係からみて疑問である」と言われる通りである。「抄」・「集」の雑歌に見られる共通の部類意識、そのような部類を生むに至った和

歌史的背景については、別の機会に言及したので再論しないが、四季歌などの正統の部立に所属する歌と、「抄」で雑、「集」で雑一という部立に所属する歌とは、歌合歌のあつかい一つを見ても、明らかに性格上の差違が認められるのである。「雑春」以下の部立名も、これを「集」のみで見ても追加の貌と見るべきではなく、「抄」雑部の構成や、広く当時の私家集私撰集の部類意識の影響・反映という面でもらえば、決して奇異な部立名でないことが知れよう。吉川氏によって提示されたこの第二の論拠は、現段階にあっては、ほとんど存立の基盤を失っていると言わなければならない。

さらに、二期にわたって編纂されたと考えていく上で問題になるのは、「集」における「抄」歌のあつかいである。現在われわれの見得る「集」においては、明らかに「抄」の歌は一首残らず集構造の中に組み入れていくという編纂に際しての基本方針があったものと想像され、事実、特殊な「抄」伝本の所在歌を除いて、「抄」の歌はことごとく「集」の中に受け入れられているのである。この明確な方針は、「抄」構造から「集」構造への増補を意図した当初からすでにあったものと考えられるが、もし、卷十六以後の歌がすべて追加であったとすれば、「雑春」に含まれる「抄」歌二十六首、「雑秋」の二十三首、「雑賀」十六首、「雑恋」十五首、「哀傷」の四十首の存在は、どのように考えればよいのであろうか。これらの計百二十首にものぼる「抄」の歌が十五巻からなる「集」になかったとすると、十五巻本の「集」の撰時には、まだ「抄」歌をすべて採る」という方針が出てきていなかったことになる。それが、卷十六以下が増補されるあたって「抄」歌をすべてとる」という新方針に切り変わったということになるが、それは、卷十六以下の部立に属する歌が、「抄」雑上・下にあるまとまりをなして存在する、という先の事実と矛盾するのである。この点については、久曾神昇氏によって、十五巻からなる「集」にも「抄」歌はすべてとられていた、雑上・下の歌は、「物名」「神楽歌」に属するもの以外はすべて「集」の「雑上」か「雑下」に含まれていた、ところ

が、「雑部が著しく増大したので、雑春、雑秋、雑賀、雑恋、哀傷を更に分離独立させたのではあるまいか。」とする提言がなされているが、①「抄」恋上・下を卷十一・十五の巻に拡大配置した同じ撰者が、何故雑部のみを、上・下二巻の中でのみ増大するにまかせたのか②「物名」「神楽歌」を独立した一巻として部立化した撰者が、何故「哀傷」部を立てずにおいたのか、など理解に苦しむ点が多い。

結局、集構成の面から見ていくと、「集」成立の過程に、十五巻からなる中間形態を承認せねばならぬ必要性は全く認められないのである。むしろ、今見たような、卷十五以前にも、長保三年以後の新しい歌が見出せること、「雑春」以下の五巻は、卷十五以前の「物名」「神楽歌」「雑上」「雑下」とともに、「抄」の雑部の構成の影響を受けていること、「抄」歌に対する採歌方針は、「集」撰述の初期段階から一貫していたであろうこと、卷十五までの構成では、五巻をしめる「恋」部の比重が不均衡に大きすぎる、などの諸点からすれば、そのような中間形態を認めることはかえって不自然なことと言わねばならない。このような状況にありながら、「集」二期編纂説が生き続けることができたのは、先の(イ)の項の道綱の官位表記がそれだけ証拠として重用されたということであろう。現段階では、この(イ)の項のみがこの説を支える唯一の証拠なのである。しかし、今見てきたように、他の面からは立論の余地は残されていないのだから、(イ)で示される事実を、この説のように合理的に解釈することに実は問題があるわけである。その意味でこの説は、塙保己一以来の、官位表記によって合理的に成立年代を推理するという筋道の、行き着くところであったと言えることができる。合理性の追求が必ずしも真実と重ならないという意味で、この説の場合はたいへん示唆的である。官位表記の実態がいま一度顧られなければならない所以でもあるであろう。

(注1) 片桐洋一氏「拾遺和歌集の組織と成立——拾遺抄から拾遺集へ——」(和歌文学研究二十二号)

(注2) 松田武夫氏「拾遺集と拾遺抄の関係」(『日本文学の争点』中古編・明治書院)

(注3) 吉川理吉氏「かげろふの日記併に同時代の物語共と源氏物語との関係——附一 拾遺集所撰年代の考証、拾遺抄について」(『国語国文七卷九号』「拾遺抄について——拾遺集所撰年代考補——」(『国語国文八卷三号』)

(注4) 田中新一氏『平安朝文学史』(明治書院)「拾遺集」の項

(注5) 「三代集之間事」には「師説云、あさまだきあらしの山のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき法皇令書此集給可如斯。作者公任卿。成意鬱殊有存旨。ちるもみぢばをと詠に。更推而不可被改企抄出之意趣発自此哥云々」と記されている。

(注6) 『平安稀観撰集』(古典文庫)如意宝集・解題

(注7) 「拾遺抄から拾遺集へ——異本拾遺集をめぐって——」(『国語国文三十卷二号』)

(注8) 「拾遺和歌集異本考」(『ブリア 昭三八・三』)「北野天満宮本拾遺和歌集について」(『女子大文学』昭三八・三)『拾遺和歌集定家本上・下・校異篇』(古典文庫)

(注9) 和歌文学学会例発表(昭三七・一〇)、「拾遺集時代の和歌——受領層歌人を中心とする一視点の設定——」(『国語と国文学』四一巻七号)「拾遺集の本質——三代集の終結点——」(『国語と国文学』四四巻十号)

(注10) 『拾遺集北野本』(昭三九・刊)

(注11) 和田信二郎氏「拾遺和歌集撰集の年代を推改して藤岡博士の研究を疑ふ」(『国学院雑誌』十二巻五号)

(注12) 鴻巣盛広氏「拾遺和歌集と拾遺抄」(『国文学』十四巻十二号)

(注13) 和田英松氏『皇室御撰之研究』

(注14) 三好英二氏『校本拾遺抄とその研究』一〇九頁

(注15) (3)は、「左大升行成」に関する部分は該当しない。詠歌時点を長保三年と定め得ること。

(注16) 前掲論文(注11に同じ)

(注17) 武田祐吉氏「拾遺和歌集の研究」(『国学院雑誌』二十一巻十二号)

(注18) 前掲論文(注12に同じ)

(注19) 図書寮本「抄」の本文による。

(注20) 「集」五八八の詞書は「左兵衛督高遠賀茂になぬかまうてけるはてのゆめにみやしろよりとてちはやきたるをうなのふみをもてきたりけるをあけて見侍ければかくかきて侍けるそのうち大貳になりて侍ける」とあり、「左兵衛督」は前任の官が示されたものとわかる。

(注21) 三好英二氏によれば、「抄」中製作年代の明らかなもので、もっとも新しい歌は、巻十・五七八「世の中にあらましかはとおもふ人なきかおほくもなりにけるかな」(為頼朝臣)であり、長徳元年六月頃の詠であるとする。

(注22) 前掲論文(注12に同じ)

(注23) 「拾遺抄及び拾遺集の成立についての考察」(国語国文六卷八号)

「二」(第二章)

(注24) 前掲論文(注1に同じ)

(注25) 前掲論文(注3「かげろふの日記併に同時代の物語共と源氏物語との関係」)

(注26) 『校本拾遺抄とその研究』第三章第四節「拾遺抄後出説の検討」

(注27) 前掲論稿(注6に同じ)

(注28) 「藤原公任伝の研究」(東海大学紀要第二輯)

(注29) 前掲論文(注7に同じ)

(注30) 前掲論文(注9「拾遺集の本質―三代集の終結点―」)

(注31) 「拾遺和歌集の雑歌」(和歌文学会第十五回大会口頭発表於徳島女子大学)

(注32) 前掲論稿(注6に同じ)